

# メータオ・クリニック支援の会（JAM） 会報メール 第74号

[2015年6月号]

NPO法人メータオ・クリニック支援の会（JAM）支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。  
JAM 会報メール第74号をお送りします。

JAM は2008年3月に発足されたNGOです。ビルマ／ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へJAMの最新の活動をほぼ毎月中～下旬ごろ会報メールにて発信いたします。  
今後ともどうぞよろしく願いいたします。

<目次> [ページ]

スタディーツアーはキャンセル待ちになりました

メソトマンスリー

国内から

編集後記

次号の予定



## スタディーツアーはキャンセル待ちになりました

先月号でご案内をいたしましたスタディーツアーの申込者数が定員に達しました。お申込みありがとうございました。

引き続き、キャンセル待ちという形で受付をしております。

キャンセル待ちをご希望の方は、support@japanmaetao.org（担当：中村）までご連絡ください。

ツアーの詳細につきましては、当会ホームページをご覧ください。

\*\*\*\*\*

2015年度メータオ・クリニック支援の会主催

～ミャンマー難民・移民の暮らしと医療について考える旅～

私達、メータオ・クリニック支援の会 Japan Association for Mae Tao Clinic (JAM) は、タイ・ミャンマーの国境にある難民診療所と周囲の移民達のコミュニティーへの支援を行っている団体です。JAM のスタディーツアーでは普段なかなか訪問することができない、タイ・ミャンマー国境にある難民診療所（メータオ・クリニック）や難民キャンプを訪問します。国境の町（MAESOT）で移民・難民の医療・教育・生活を見て感じて考える旅にあなたも参加してみませんか？

ツアーでは他にも、ノーベル平和賞候補にもなった避難民の為の診療所（メータオ・クリニック）のシンシア医院長との会談や、JICA 長期専門家などで途上国の地域保健・学校保健で活動し、現在は琉球大学・国際地域保健学教室の教授であり、JAM 代表でもある小林潤による国際保健入門ワークショップを企画しています。さらに JAM から派遣されている現地駐在の看護師スタッフとの座談会も予定しています。ミャンマー／ビルマ難民、移民の保健・医療の問題に関心のある方は、是非この機会にご参加ください。

お申し込みの前に、募集要項を必ずご確認ください。

■ 日時：2015年9月7日（月）～9月12日（土） 5泊6日（バンコク、スワンナプーム空港集合、解散）

■ 参加費：80,000円

\*同室割り ツインルーム1室を2名で利用（友人・知人同士で参加される場合）1名につき3000円値引きいたします。ただし、お一人でのお申し込みでツインルームをシェアご希望の方は、人数の関係によりシングルルームのご利用となる場合がございます。ご了承ください。

\*早割 6月中に参加申し込みされた方は2000円値引きいたします。

\*参加費にはバンコクからメソトへの移動費、現地メソト移動費、宿泊代、難民キャンプ訪問代、コーディネート代、現地での昼食・夕食それぞれ3回分が含まれています。日程表をご確認ください。

バンコクまでの航空運賃、現地でのお土産代、飲酒代、その他個人的な支出などは含みません。

\*参加申し込みをされて参加費ご入金後のキャンセルは、やむを得ない場合を除き、基本的に参加費の返金は致しかねます。



■ 対象：JAM 賛助会員

非会員の方は、賛助会員になることが条件となります。賛助会員費として、一般 3,650 円、学生 1,825 円が必要となります。詳しくは JAM のホームページをご覧ください。

■ 定員：10 名（応募多数の場合は先着順、催行人数 8 名以下の場合は中止となります。）

■ 申込締切：2015 年 7 月 20 日（月）

■ お申込方法：

・以下を明記の上、申込みする旨をメールで support@japanmaetao.org（担当：中村）へお送り下さい。

メールタイトル 「2015 年スタディーツアー申込み」

- (1) 氏名
- (2) 住所（都道府県のみで結構です）
- (3) 年齢
- (4) 職業
- (5) その他ご希望があれば記載してください。

お申込メールを確認後、こちらより正式な申込書類を添付したメールをお返しいたしますので、その書類に記入、押印のうえ、郵送にてお送りいただくこととなります。この書類が正式な申込書となります。

メソトマンスリー

【メソト＝鈴木 みどり】



## 最近のメソット

『国境のゴミ拾い活動に参加して』

6 月 6 日、今年も世界環境の日になんで、メータオ・クリニックの清掃活動(ゴミ拾い)のイベントがありました。

私も学校保健のスタッフとして、移民学校の子供達や他のボランティアと一緒に参加しました。

メータオ・クリニック前の通りをメソット空港までみんなでゴミ拾いをした後、国境まで車で移動して、国境の川沿いにあるタイ側の道路を 1~2 キロほど手分けしてゴミ拾いをしました。

いつもは自転車でクリニックの周りを移動しているので、路上のゴミは少し目に付くだけでそんなに気になりませんでした。

でも、意識して歩くと、その多さにすぐに気がき



ます。特に多いのはプラスチックのゴミで、横断幕など大きなものからストローまでいろいろです。歩道を100メートル程進むと用意したゴミ袋5~6袋が満杯になりました。タイ側の国境では更にペースが上がりました。みんなでせっせとゴミを集めて道路はかなりすっきりです。

しかし、国境を越えた部分を見ると、さらに大量のゴミが投棄されていました。繁みの間や土手に隠れるように積もったゴミが放置されたままになっています。時折、国境を越えて来た人たちの一部が、食べ物の袋などを、ためらいもなく国境の先に投げるのを目にします。

近くに大きなゴミ箱があるのに、どうして反対側に捨てるんだろう…。

すぐに通り過ぎるだけの無国籍の土地だと、汚しても気にならないのか、と悲しくなります。

ゴミ拾いをずっと観察していたタイの警察や軍の関係者の方々が、メータオ・クリニックの活動だと聞いて感心して、一緒に記念撮影をして活動は終了しました。

町がきれいであって欲しい…

地域の一員になってこそ芽生える気持ちだなあと、しみじみ感じました。

(写真下) 国境の橋の上から、旅行中の方が写真を撮って下さいました。



## 国内から

【東京＝神谷友子】

JAM 日本事務局の神谷です。普段は、東京にある障がい児の療育病院で看護師の仕事をしています。ちょっと普通の病院とは異なった特色のある病院なので、今回は私の職場につい



てご紹介させていただきたいと思います。

昨年まで勤務していた病棟では、家庭の事情などで家族とともに自宅で生活することができない障がいを持ったお子様が長期入所していたり、日帰り～2週間程度のショートステイや、親子で6週間泊まり込み集中訓練を行っています。生まれながらに染色体異常のある子、虐待で頭部に損傷を受けて後遺症が残ってしまった子、交通事故やプールに溺れたなどで身体機能にダメージを受けてしまった子、などなど、障がいの種類も理由も様々です。

長期入所されているお子様のご家庭も、主な療育者であるお母様が病気のためお子様の世話ができない、ひとり親のため仕事しながらお子様を見ることが困難、親による虐待がある、自分の子どもの障がいを受け入れることができない親御さんなどそれぞれご事情があります。お子様たちは、院内にある保育室へ行って保育士と遊んだり、敷地内に併設されている特別支援学校の授業や、理学療法での立位・歩行練習、作業療法で手の動きや食事摂取のリハビリを受けています。6週間の集中訓練のメニューでは、さらに言語聴覚士や心理士がそれぞれのコミュニケーションについての発達を見ています。

ここでの看護師の仕事は、入所されているお子様たちの日常のお世話になります。着替え、食事やおやつ・歯磨き介助、排せつ介助、学校や保育への送り、入浴、お子様によっては人工呼吸器、胃瘻、経鼻胃管などがあるのでその管理、呼吸機能の改善の目的で薬物吸入や喀痰吸引、腹臥位など姿勢による排痰介助などです。夜なかなか眠れないお子様の布団の横で添い寝したり、日中に時間があるときは抱っこして本を読んだり、病棟のベランダにあるブランコで遊んだりもします。また、親子入園されている方の中には受傷してすぐの方もいて、経管栄養剤や痰吸引、薬の管理の方法などをお母様にご指導させていただいたりもしています。医療的なケアとしては、採血、レントゲン検査の介助、導尿カテーテルの管理、皮膚の処置、点滴の管理があります。

てんかん発作のあるお子様も多く、一時的に呼吸が止まってしまうこともあるので目が離せません。家庭で一緒に生活されているご家族は、24時間常に気が抜けなくて、とても大変だろうと思います。自分で姿勢を保てないため、体が傾いたら自力では直せなかったり、何でも口に入れてしまったり、痰を詰まらせて窒息する危険もあります。

現在勤務しているのは整形外科の病棟で、脳性麻痺や、二分脊椎、骨形成不全症、先天性股関節脱臼などに対して、委縮した筋肉を切って関節の動きを広げたり、足の変形を改善するための手術を行っています。術後はギプスで固定されることが多く、看護師は、ギプスによる皮膚損傷や圧迫による血液の循環障害がないかを見ています。術後にリハビリをして、車椅子・杖・下肢装具を使用し、手術直後は痛みでベットから動けなかったお子様がだんだん歩けるようになって退院していく姿を見るのはとてもうれしく感じます。

障がいがあるからこそ、どのお子様も本当に個性が様々で、みんなとってもかわいいです。言葉でのお話が上手にできない分、表情や仕草により目がいくせいかもしれません、ちょっとしたことが大きな喜びに感じられます。

最近、バリアフリー化が進み、電車や大型スーパー、遊園地、公共の施設などで障がいを持った人を目にする機会も増えてきたような気がします。それでも、身近にいないと、同じ地域でこのような障がいを持って生活している人の存在は実感しにくいのではないのでしょうか。

同様に、ミャンマーの難民・移民の人々の存在や彼らの生活についての現状や、どんな支援が必要とされているかなど、なかなか社会に伝わりにくいところはあるかと思うのですが、まずは私自身が知って、できることを行動におこしていきたいと思います。





(病棟内での写真)



(病院敷地内風景←お子様たちと散歩したりします)

## 編集後記

日頃、わが子と利用している児童館で誘われたので先日、わが子をつれて近所の小学校にお邪魔してきました。

「赤ちゃんとのふれあい事業」ということで行ったのですが、小学校高学年の児童が赤ちゃんを抱っこしたり、一緒に遊んだり、保護者から子育ての話や出産にまつわる話を聞いたりして交流する事業でした。

事前に保健センターの保健師が小学校に出向いて、妊娠、出産、赤ちゃんとの暮らしなどについて授業をし、児童たちは、赤ちゃんの人形を使って抱っこの練習をしたり、手遊びを練習したりといった事前学習をしたうえでの当日でした。

教室に行くと、みんな、エプロンとマスクをしてうれしいようなどきどきするような面持ちで待っていました。弟や妹のいない児童ばかりで本物の赤ちゃんを抱っこするのも、初体験だったようです。

「産むときって痛かったんですか?」「赤ちゃんは何を食べているんですか?」「離乳食って作るの大変ですか?」「好きな遊びはなんですか?」などの質問もありました。みんな、赤ちゃんをとっても大切に扱ってくれて、一生懸命あやしてくれたり、ちょっぴり照れながら、「とんとんとんアンパンマン♪」と手遊びも披露してくれたり、真剣に取り組む様子がほほえましくて、私も元気をもらいました。

